丹波篠山市史『地域編』編さん

キックオフ シンポジウム

参加費無料
ぜひお越しください

―市民とともに作り上げる「丹波篠山市史」―

令和６年1月13日(土) 13:30 ~ 15:45

場所　丹波篠山市民センター

第一部　**基調講演**

「未来につなぐ地域歴史遺産
―伝統文化や史料を基盤としたまちづくり―」

講師　園田学園女子大学　学長　大江（おおえ） 篤（あつし）さん

パネルディスカッション

「地域編の編さんに向けて」

第二部　**トークセッション**

「丹波篠山市の歴史を未来につなぐために」

地域資料整理サポーター

丹波篠山市の市史編さんを一緒にサポートしませんか

収集資料の解読、目録作成　写真撮影

資料のクリーニング　手書き資料の入力

収集資料の整理をお手伝いいただける方を募集しています。活動日には、サポーターの皆さんがひとつの資料を囲んで、その内容から書かれた時期や地域を推理していくワクワクするような時間があります。今は使われなくなった旧道や村の行事などの知識が、地域の資料を紐解く重要な鍵になります。ご連絡をお待ちしています。

活動日

日時　毎週水曜日　13：00～17：00

場所　中央図書館　創作活動室

※活動日のほかに、年に６回の研修会があります。

丹波篠山市史編さんだより
第２号　令和５年12月21日発行

発行　丹波篠山市立中央図書館
〒669-2206　兵庫県丹波篠山市西吹88-1　Tel 079-590-1301
開館時間　10：00～18：00（金曜日は19：00まで）
休館日　月曜日（祝日開館、次の平日を休館）・年末年始（12/29～1/4）

丹波篠山市史編さんだより

第２号
令和５年12月

（個人所蔵資料）

戦時下の防火訓練

日中戦争の拡大や国際緊張の高まりに伴って、１９３９（昭和14）年に警防団令が発令され、丹波篠山でも村ごとに空襲に備えた警防団が組織されました。また、各家庭でも空襲で発生した火災の消火が義務付けられるようになり、隣保などで防火訓練が行われるようになりました。

写真は、日置の元大庄屋、波部本家の前で撮影された、防火訓練の集合写真です。写真の中央奥に軍服のような服装で立っているのが日置村の警防団員であり、もんぺに防災頭巾やヘルメットを着用した男女が並んでいます。長いはしごの横には長い竿の火叩きが立てかけられ、人々の前にはバケツリレーを行うためのたくさんのバケツと担架が置かれています。

丹波篠山は実際に空襲にあうことはありませんでした。しかし、空襲警報は何度も発令され、そのたび、家の前に警報発令中を示す赤い旗を立て、近くの防空壕（ごう）に逃げ込む日々だったのです。

現在の波部本家付近

背景に写る堂々たるかやぶきの大屋根は、近世に大庄屋などを務めた波部本家の母屋です。街道を挟んで両側に広がるおよそ一町（約１ha）の敷地には、たくさんの米蔵や酒造蔵、土蔵、うまや、使用人部屋、茶室などが並び、豪農波部本家にふさわしい威容を誇る大邸宅がありました。米の収穫の季節には、小作米を積んだ大八車（だいはちぐるま）や牛がひしめき、街道を埋めたといいます。

波部本家は黒大豆の品種改良に精力的に取り組んだことでも有名です。西紀川北地区の川北黒大豆や、波部六兵衛（はべろくべえ）・本次郎（もとじろう）親子により生み出された波部黒といった優良種は、やがて地域を越え、丹波篠山地域の農業を支えるブランド「丹波黒」として現代の農業に大きな影響をあたえました。

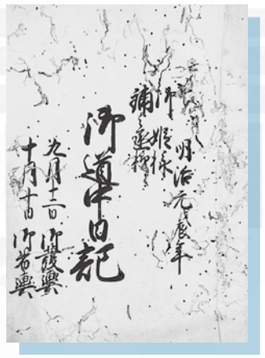
収集資料紹介

明治元年、篠山藩の御姫様と若君の帰国

神戸大学大学院人文学研究科特命助教　松本充弘（まつもとあつひろ）さん

篠山帰城の行程（東京→丹波篠山）［1868年］

9月													10月									
12	13	14	15	16・17	18	19	20	21	22	23	24	25～29	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
川崎	藤沢	小田原	三島	原（逗留）	蒲原	府中	金谷	掛川	浜松	吉田	岡崎	刈谷（逗留）	宮	桑名	庄野	土山	石部	大津	京	亀山	福住	篠山着城
神奈川			静岡							愛知			三重			滋賀			京都		兵庫	



近世編専門部会では、今年度から旧篠山藩主の青山家文書を集中的に調査する取り組みが始まっています。そのなかから注目が集まった「御姫様・鋪之丞様御道中日記」について紹介いたします。これは、当時の篠山藩主・青山忠敏（ただゆき）（1834～73）の子女が、明治元（1868）年９月12日に東京青山の藩邸を発し、東海道を利用して篠山へ帰国した10月10日までの、28日間にわたる日記です。

慶応４（1868）年４月に江戸城が明け渡された後、７月17日に江戸は東京と改称され、８月４日には明治天皇による東京行幸（御東幸（ごとうこう））の布告が出されました。そして、９月には元号が明治と改められます。このような状況下で、東京の藩邸で暮らしていた諸侯（しょこう）の妻子や家臣は、国許へ立ち帰ることを新政府から命じられていたのです。

日記の主人公である「御姫様」については、具体的に特定できる情報は記されていません。一方の「鋪之丞様」は先代藩主忠良（ただなが）（1807～64）の十男で、後に鳳鳴義塾を設立する青山忠誠（ただしげ）（1859～87）のことです。文久３（1863）年に兄忠敏の養子となり、明治元年の時点ではまだ９歳でした。

折しもこの時の篠山帰国は、明治天皇の東幸（９月20日京都発、10月13日江戸城入城）と期間が重複し、行程にもしばしば影響しています。その最たるものは、一行が三河国岡崎（愛知県）に到達していた９月24日です。ここで、翌日昼の休息をとる予定であった池鯉鮒（ちりゅう）（愛知県）を天皇が通過するかもしれないという情報がもたらされました。そこで一行は東海道を外れた刈谷（愛知県）への回り道を強いられ、天皇の行列が通過するまで滞在を続けます。刈谷での足止めは５日間におよび、宿泊などにかかる出費もかさんだことから、付き添っていた家臣たちは気苦労が絶えなかったことでしょう。

旅日記としての見所は多く、箱根の関所を越えるにあたっての緊張感や、尾張藩の御座船（ござぶね）を借用しての「七里（しちり）の渡（わた）し」通過、石山寺（滋賀県）や知恩院（京都府）への参詣など、興味深い記述が連ねられています。新政府に対する東北諸藩の激しい抵抗の余波も冷めやらず、時勢を見定めにくいなかでの篠山帰国であったと思われますが、京口橋をわたって城下に入ることができた一行の心情は、まさに安堵の一言だったのではないでしょうか。

明治天皇による御東幸の様子
（『東京御遷幸と東海道五十三次』、1917年、日就社、国立国会図書館所蔵）

糸紡ぎで人紡ぎ

－丹波木綿と縞帳（しまちょう）－

７月、地域資料整理サポーターの山﨑登久子（やまざきとくこ）さんにご協力をいただき、「丹波木綿と縞帳」と題して、丹波篠山の生活の布である丹波木綿と、そのデザイン帳である縞帳の展示を行いました。また、展示にあわせ、畑で収穫した和綿を使って、種をとる綿繰（わたく）りや繊維をほぐす弓打ち、糸紡ぎの工程を体験するワークショップも開催しました。

丹波木綿の魅力や手仕事の楽しさをお伝えする目的での開催でしたが、むしろ参加された多くの方々から、「懐かしい」の言葉とともに、おばあちゃんの機織りの光景やお手伝いで綿繰りをした思い出など、貴重なお話を聞かせていただく場となりました。

歴史に残る大きな事件とは違い、普段の生活やなにげない日常は、文字や映像として残されにくいものです。急激に暮らしが変化するなかで、機織りのように、いつの間にか暮らしの中から消えていったものもたくさんあります。語られる記憶は、書き残されなかった人々の姿を掘り起こすための数少ない手がかりです。

人々の記憶を紡ぎ、失われつつある地域の姿を記録することも、市史編さんの大事な役割のひとつです。情報の提供をお待ちしています。

資料を探しています

丹波篠山の歴史を知る手がかりとなる資料を探しています。

・古文書　・地図や絵図　・写真　・チラシ、広告
・古い雑誌や会誌、記念誌、日記　など

例えば、古い記念写真や個人的な家族写真からでも、当時の服装や生活様式を知ることができます。
心当たりがある方や、情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、市史編さん室までご相談ください。

丹波篠山市史編さん専門部会活動報告（令和５年４～12月）

活動	部会の活動内容	
4/14	文化財編	第1回部会
5/18	古代・中世・近世編	県立篠山鳳鳴高等学校所蔵青山文庫・青山歴史村所蔵史料調査
5/19	考古編	第1回部会
5/27~28	古代編	第1回部会・市内巡検
6/10~11	中世編	第1回部会・市内巡検・青山歴史村所蔵史料調査
6/23	文化財編	第2回部会
7/27	考古編	第2回部会
7/28	文化財編	第3回部会
8/ 7~ 8	古代編	市外巡検（京都府旧桑田郡方面）
8/ 8~ 9	近世編	第1回部会・古文書調査合宿（青山歴史村藩政日記調査）
9/19	自然環境編	第1回部会
10/20	考古編	第3回部会
10/24	自然環境編	第2回部会
10/28~29	古代編	第2回部会・市内外巡検
11/11~12	中世編	第2回部会・市内巡検・和田寺文書調査
12/ 9~10	古代編	市外巡検（丹後方面）
12/17	近世編	第2回部会・調査報告会

中世編専門部会による和田寺文書の調査